総ページ数：49 p

2023 年度

発酵メディア研究ゼミ論文

指導教員：チェン ドミニク

題目

「まちづくりコミュニティにおける鍵を用いた居場所づくりの研究」

早稲田大学文化構想学部
表象・メディア論系
学籍番号： 1T200422

佐古　瑛大朗

概要（アブストラクト）

本研究は、ある空間の鍵を共有することによって、その場や鍵を共有する集団の中で居場所を生むことの醸成を目指すものである。筆者は、日本の郊外の街に住む中で、地域主体のまちづくり活動に触れ、郊外の街の個人主義化という問題を認識した。この社会変化の中で、まちづくりの形も変化しており、国内各所で様々な取り組みとそれに伴う研究が行われていることがわかった。筆者はその中でも活動を行うコミュニティに注目し、新規参入者をいかにして受け入れるか、またそのコミュニティを居場所として実感させるかに注目した。本論では鍵にまつわる日本文化に触れながら、鍵の象徴性をコミュニティにおける居場所づくりに応用することを試みる。実験と考察を通して、本研究単独で居場所を作ることは難しいが、相手に対して他のコミュニケーションにはない独自のアプローチが可能であることがわかった。

目次

「まちづくりコミュニティにおける 1
鍵を用いた居場所づくりの研究」 1
1. はじめに 1
1.1. 研究の背景と動機 1
1.2. 論文の構成 2
2. 関連動向 3
2.1. 郊外のまちづくり 3
2.1.1. 郊外の現状 3
2.1.2. 「次世代郊外まちづくり」運動 4
2.2. 街を育てる 6
2.2.1. 都市と個人主義 6
2.2.1. シビックプライド 6
2.2.2. サードプレイスの方法 7
2.3. まちづくりに関するまとめ 11
2.4. 鍵の信頼感の変遷 11
2.4.1. 鍵の文化 11
2.4.2. 鍵の象徴性 12
2.5. 関連動向のまとめ 14
2.5.1. 作品への展望 15
3. 予備実験 16
3.1. これまでの制作について 16
3.2. 予備実験概要 17
3.3. 制作動機 18
3.3.1. 街への興味の醸成 18
3.3.2. 仮説 18
3.4. 作品の制作過程 19
3.4.1. 樹について 19

3.4.2. 建物などについて 20
3.4.3. 鑑賞者の参加について 21
3.4.4. 制作まとめ 22
3.5. 作品の詳細 24
3.6. 作品の評価 25
3.6.1. 仮説に関する考察 25
3.6.2. 反省と改善点 26
3.7. 作品の展開 27
4. 本実験 28
4.1. 実験案の検討 28
4.2. The Third Box の提案 29
4.2.1. 条件と実験案の整理 29
4.2.2. 実験で扱うもの 30
5. 評価 35
5.1. 実験の日程と参加者 35
5.2. 実験結果 35
5.2.1. 事前インタビューについて 35
5.2.2. 実験全体の流れ 37
5.2.3. 事後インタビュー 38
5.3. 考察 39
5.3.1. 仮説に関する考察 39
5.3.2. 仮説以外の効果 40
5.3.3. 実験の反省と改善点 41
6. 結論 42
6.1. 本論のまとめ 42
6.2. 今後の展望 42
7. 謝辞 43
8. 参考文献 44

図目次

図 1. 東急線沿線の人口動態 1
図 2. WISE CITY のイメージ 10
図 3 Manipulatable Machi Module 17
図 4. マップ(写真が蓄積されていく) 17
図 5.Fertile Machi の植物パート 20
図 6. 制作中の外壁 21
図 7. 壁が苔むした建物 21
図 8. 意見を書くために用いた名札 22
図 9. 住居に見立てた植え替え用ポット 22
図 10. 参加者に向けたボード 24
図 11. 共通室の様子 31
図 12. The Third Box 初期状態 32
図 13. 南京錠の仕組み 33
図 14. 鍵(灰色が 1 番、黒が 2 番) 34
図 15. Instagram アカウント 34
図 16. ボックスの様子(2 日目,4 日目,6 日目) 38

表目次

表 1. Fertile Machi 集計結果 26
表 2. 参加者の参加日程 38

1. はじめに

1.1.　研究の背景と動機

多くの人が日々家庭と職場または学校を往復している。コロナ禍におけるテレワークやオンラインサービスの普及により生活の形は変化したが、およそ 4 年が経ち再び従来の形に戻りつつある。郊外の街は夜に家に帰るためだけに利用され、周辺住民の顔も知らないような個人主義化が加速しているのだ。この個人主義化が進んだ街では住民同士の会話は生まれない。人々は寝るためだけの街に愛着を持たず、興味を失ってしまっている。そのような中で街に興味を持ち街の活動に参加する人が増える方法を考えたい。

筆者は神奈川県横浜市に在住しており、いわゆる郊外で 20 年近く過ごしている。筆者の住む東急田園都市線たまプラーザ駅付近のエリアは、幅広い世代から人気の住宅地で平日の昼や休日も賑わいを保っている。神奈川県の人口が 2021 年に戦後以来はじめて減少に転じた一方で、このあたりの人口は図 1[1)]に示すように 2035 年までは人口が増加傾向にあると予測されている。しかし、その後他の地域と同じく減少に転じる予測である。そのため、人口減少や高齢化を見越し 2010 年代から「次世代郊外まちづくり」運動が展開されている。

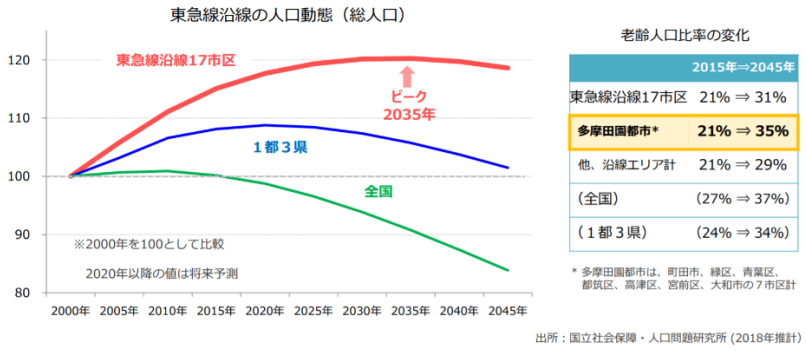


図 1. 東急線沿線の人口動態

この活動は 2023 年現在まで 10 年以上継続され、地域で多数のイベントをはじめ、地域の小中学校を巻き込んだワークショップの開催、地域拠点の開設などにより地域住民同士の交流を活性化させている。2023 年 4 月には「次世代郊外まちづくり通信」と呼ばれる定例報告も 37 回を数え、地域に定着してきている。筆者も小学生時代には発足初期のイベン

[1)] 東急株式会社「長期経営構想」2019 より資料をダウンロードして引用
(https://ir.tokyu.co.jp/ja/ir/management/lplan.html)　(2023/12/12 閲覧)

トに参加したことがあり、大学生になってからこの地域でイベントの企画をした際に協力していただいた。

地域の高齢化や人口減少は、日本の多くの地域で課題となっているテーマである。この課題は、地域コミュニティの関係希薄化に繋がり、災害時の連携不足といった問題を引き起こしているのだ[2)]。この問題を解決するためには日ごろから地域の交流の機会を設け、地域コミュニティを維持する必要がある。筆者は、実際に地域のイベントに参加する中で、既存のコミュニティに新参者として入っていくことに一種の抵抗感を覚えた。この経験から、地域コミュニティを醸造するためには既存のコミュニティに参入することと、継続して活動に参加することに課題があると考えた。本論文では、住民のまちづくり参加と地域コミュニティ醸成について、たまプラーザ駅付近の実例を用いながら、既存コミュニティへの「参加しにくさ」を解消し一体感を持つ方法を考えたい。

1.2. 論文の構成

本論は以下の流れで構成される。まず、第二章では、関連動向として郊外の街の歴史と問題点、それに対する昨今の考え方を学び、実験案に繋がる鍵の歴史文化について学ぶ。第三章では、夏に制作した『Fertile Machi』に触れ、筆者の街づくりに対する態度を明らかにする。そして第四章では、第二章の分析を踏まえ『The Third Box』を提案し、実験内容を説明する。第五章では『The Third Box』を実践した結果とその考察を行い、仮説の評価と改善点の分析を行う。そして最後に第六章で第五章までの論をまとめ本論を終える。

[2)] 消防庁国民保護・防災部 防災課「災害対応能力の維持向上のための地域コミュニティのあり方に関する検討会報告書」2009 より

2. 関連動向

2.1. 郊外のまちづくり

2.1.1. 郊外の現状

まちづくりは、都市や地域の発展において重要な概念であり、その成果は建造物や交通インフラといったハード面と、生活者コミュニティや文化といったソフト面を合わせた取り組みに依存している。この二つは相互に影響を与えながら地域のアイデンティティを形成している。

現在、東京や大阪をはじめとした都市の郊外の地域では入居から半世紀が経ち都市の拡大や建物の老朽化とともに住民の高齢化が問題となっている。特にニュータウンでは住民の年齢構成が偏っており、国土交通省の資料でも、

> 同一時期に大量かつ画一的な住宅供給が行われ、同一世代の一斉入居が進んだため、郊外ニュータウンにおける人口は、偏った年齢構成となっています。また、多くの住宅が築 30 年以上を経過しており、設備の老朽化や、バリアフリー未対応の住宅等建物自体にも課題が生じています。[3)]

と、問題意識が共有されている。さらに日本商工会議所による調査でも、「中心市街地における人流」に対する回答で「少子高齢化の進展で人流が減少」と回答した所が 69%と 7 割近い結果となっている[4)]。このことから見ても、多くの地域で共有できる課題観であると指摘できる。

現在このような地域では、老朽化した建物やインフラをすべての人に使いやすいようにリノベーションするハード面の再生事業が行われている。しかし、このような地域における問題はこれだけでない。古くから住む既存住民と再開発区域に新たに転居してきた新規住民の乖離が生じており、新たな地域コミュニティ醸成が課題となっているのだ。ここからは、ソフト面の郊外の都市再生について確認していく。

阪神淡路大震災を経た 2000 年代、経済の低迷、災害の頻発などにより社会不安が増大し所謂「無縁社会」(ＮＨＫスペシャル 2010 年 01 月 31 日(日)放送、「無縁社会～“無縁死”

[3)] 国土交通省「大都市圏郊外におけるまちづくり（柏市豊四季台団地における取組み)」2014 より (https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h26/hakusho/h27/html/n1222c40.html)（2023/12/12 閲覧）

[4)] 日本商工会議所「2021 年度「民間主導のまちづくりに関する実態調査」報告書」2022 年 3 月，p.6 より

３万２千人の衝撃〜・造語)という言葉が注目されるようになった。その解決主体として「地域」への期待が高まり、伝統的な地域組織である町内会・自治会が見直されると同時に、2000 年代前半は、いかに「地域力」を高めていくか、いかにして「社会関係資本」を強めていくかが政策課題として浮上していた[5)]。このように、個人主義化が進んだことで、高度経済成長期に一度衰退した地域自治が見直されることとなった。和田はさらに自治を行う現代社会のコミュニティの在り方について、「多元型コミュニティ」を提起している。

和田は、日本の伝統的な町内会・自治会といった伝統的地縁組織に一元化されたコミュニティの形態を「一元型コミュニティ」、このような地縁型コミュニティに、目的・機能型市民組織であるテーマ型コミュニティが合流したのが「二元型コミュニティ」と概念化する[6)]。その上でこの「二元型コミュニティ」に職域型コミュニティが合流したのが「多元型コミュニティ」であると提案している。ここで初めて地縁組織、目的型組織に加えて企業が地域協働に参加する集団が提起された。この「多元型コミュニティ」は従来の「地縁系」と「テーマ系」という二元的に把握されていたコミュニティ組織化論では説明のつかないほど多様な事業展開をしていると指摘する[7)]。

ここまで見てきた近年の社会変化を経て「人を 『選ぶ』まちづくり」から「人に 『選ばれる』まちづくり」へと変化している。企業や行政が郊外の暮らしを定義し、集合団地のように画一的な開発を行うだけでは人が集まらず、代わりに地域の生活者同士のコミュニティや過ごしやすさを重視した開発が好まれているのだ。このためには多様な取り組みにより、ハード面の再生と同様に、地域全体の人間関係や共感を築くことが、持続可能なまちづくりに不可欠だ。その上で、「人に選ばれる」まちづくりを推進し、地域全体が多様性を尊重し、誰もが生き生きと暮らせる魅力的な場となるよう努めていくことが重要である。

このようなまちづくりは全国で広がっており、地域の状況に合わせて災害に強いまちづくり、福祉に特化したまちづくり「地域共生社会」などその様相は様々である。次節では、その中でも筆者が在住しており、郊外のまちづくりのパイオニアとなっている横浜市青葉区の例を見ながら、次の世代に繋げる郊外のまちづくりについて考察していきたい。

2.1.2. 「次世代郊外まちづくり」運動

横浜市と東急電鉄(現:東急株式会社)が共同で進める「次世代郊外まちづくり」運動は、都市近郊の郊外住宅地において、人口減少や高齢社会の進展などの課題に対応し、持続可能で

[5)] 和田清美「現代コミュニティの社会設計：新しい〈コミュニティ形成・まちづくり〉の思想」学文社，2021，p.216 より

[6)] 同書，p.135 より筆者編集

[7)] 同署，p.135 より筆者編集

魅力的なコミュニティを再生・構築するための戦略だ。基本構想は、横浜市と東急電鉄が研究会やまちづくりワークショップを通じてまとめたものであり、「たまプラーザ駅北側地区」をモデルに、「産・学・官・民」の協働を重視している[8)]。

基本構想の目的は、「たまプラーザ駅北側地区」を起点に、連携したまちづくりにより、良好な住環境とコミュニティの持続・再生を達成するビジョンを提示することだ。この目的を達成するために、基本理念として「既存のまち」の持続と再生を最優先し、「産・官・学・民」の連携により人口減少社会や高齢社会の諸課題に対処することが掲げられている。

取り組みの基本理念には、既存のまちの再生を重視するとともに、建物や都市機能の更新、再生といったハードな側面と、持続可能な「仕組みづくり」を組み合わせたまちづくりが強調されている。これにより、単なる施設の更新だけでなく、地域全体のシステムやインフラの健全な発展が促進されることを狙っている。

役割分担として、「産・官・学・民」の連携や協働が基本となり、地域住民や市民活動団体、民間企業などが主体的に参加し、基本構想を共有し連携して取り組んでいくことが強調されている。これにより、地域コミュニティの多様な意見やニーズを反映させながら、まちづくりの方針を柔軟かつ包括的に進めることが期待できる。

最終的な目標として、「WISE CITY」と名付けられた将来のまちの姿が提示されている。このコンセプトは、既存のまちが革新的に再生され、持続可能な住環境とコミュニティが築かれる未来の郊外住宅地の理想像を表している。横浜市と東急電鉄はこの基本構想を通じて、地域社会が将来にわたり発展し続け、住民が生き生きと快適に過ごせるまちを実現するための取り組みを進めている[9)]。

ここまで見てきたことからわかることは、郊外の街では世帯年齢の偏りを背景として高齢化や個人主義化が進み、地域のコミュニティの再構築が必要とされているということである。また、住宅環境の改善により「人を「選ぶ」まちづくり」から「人に「選ばれる」まちづくり」へと変化している点も指摘できる。次節では、これらの社会変化を背景として「シビックプライド」や「サードプレイス」といった 2010 年代から盛んに使われ始めた考え方について、先行研究を用いながら日本での活用について考察していく。

---

8) 「次世代郊外まちづくり基本構想」より
(https://jisedaikogai.jp/machizukuri2013/) (2023/12/12 閲覧)

9) 東急(株)公式 HP「東急株式会社の街と住まい-次世代郊外まちづくり WISE CITY」より
(https://www.109sumai.com/development/wisecity.html) (2023/12/12 閲覧)

2.2.　街を育てる

2.2.1. 都市と個人主義

リーマンショックや人口減少といった社会の変化を経て、まちづくりの視点は大きく変化した。特に 1995 年に発生した阪神淡路大震災を皮切りにした住宅の耐震基準の強化や、ハザードマップの普及により地域防災の在り方が見直された。そこで指摘されたのは地域コミュニティの弱体化である。前節で指摘した家と職場を往復する生活は、個人主義化を進め地域のコミュニティが衰退したのだ。

2.2.1. シビックプライド

地域のコミュニティを復活させるために近年用いられているのが、シビックプライドである。直訳すると「市民としての誇り」となり、地域住民としての「アイデンティティ」を持つことを表している。伊藤は主に成人を対象に行ったアンケート調査によって、都市環境、食・自然、文化・産業、交通がシビックプライドの源泉となることを明らかにした [10)]。

森、薮谷、宋は高岡市の高校生に行ったアンケート調査によって、シビックプライドの構成要素として地域への「愛着」の醸成が重要であることを明らかにしている [11)]。また、「愛着」と「地域環境」の相関性も明らかにしており、公園や緑地環境が多く存在し子どもの頃遊んだ経験がある地域ほど地域への「愛着」が高まることを指摘している。

地域の子どもたちに「愛着」を持ってもらう方法は、学校での地域別教育などソフト面から公園・緑地整備などのハード面のまちづくりを行うことだとわかった。

対して子ども時代にそういった経験のない中高生や社会人のシビックプライドはどのように生まれるのだろうか。シビックプライドの生まれる源泉として「愛着」が挙げられた。子どもたちにとっては学校などの教育環境や公園などの地域環境がこれを生み出していたのだ。

また地域の「文化・産業」もシビックプライドの醸成要因として挙げられる。例えば、地域のお祭りや伝統工芸品などだ。高岡市の高校生を対象に行われた調査では、「地域環境」

---

10) 森豪大, 藪谷祐介, 宋俊煥「高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響-富山県高岡市に居住する高校生を対象として」日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.57 No.3，2022，pp.937-938 より

11) 伊藤香織「シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素 富山市中心市街地と富山地域を事例として」日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.54 No.3，2019，pp.618-621 より

と「文化・産業」が「愛着」を高め、「参画」、「アイデンティティ」を高めることが明らかになった[12]。

これらは、子どもたちに共通する記憶として身体に残るものだ。共通した体験があるからこそ、集団としての一体感が生まれる。そしてそれらは街への愛着、地域への帰属意識としてシビックプライドの醸成に繋がるのではないだろうか。

これを大人に置き換えて考えたとき、大人は子どもとは異なり地域間の移動を自由にすることが出来る点が指摘できる。これは地域活性のためには、街が人を「選ぶ」のではなく、人に「選ばれる」街になる必要があることを示しているのだ。このときの選ばれる理由としては、第一に居心地の良さ、そして地域への興味である。

居心地のよさとは、自分がこのコミュニティの一員であるという自覚の事である。この感覚を持つことによってはじめて、人はまたそこに行きたいと考えるようになる。そして、地域への「興味」とは大人が街のイベントに参加するために重要な要素である。自分が住んでいる街に「興味」を持っている人でないと地域に愛着を持つことがない。これはひいてはシビックプライドを持つために重要な要素ではないだろうか。

地域に「興味」を持っていない人に「興味」を持ってもらいコミュニティの一員になってもらうには、それを喚起するイベントが必要である。また、地域のコミュニティが入りやすい形であるために、それらはオープンな環境である必要がある。これらを満たすのが、サードプレイスという考え方である。

2.2.2. サードプレイスの方法

サードプレイス（Third Place）は、アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグ[13]によって提唱された概念で、家庭(ファーストプレイス)でも仕事場、学校(セカンドプレイス)でもない、第三の領域の居場所を指す言葉である。

オルデンバーグはこの場所について、「第三のとびきり居心地のいい場所」とし非公式的な出会いの場を想起している。さらにオルデンバーグはサードプレイスを定義する特徴として 8 つの性質を挙げており、「中立であること・平等主義・会話が主な活動であること・アクセスのしやすさ・常連の存在・控えめな態度,空間・機嫌がよくなる・第 2 の家」と示

[12] 森豪大，籔谷祐介，宋俊煥，前掲書，pp.938-939 より

[13] アメリカの都市社会学者、西フロリダ大学名誉教授。主な著作として「『The Great Good Place』Da Capo Press、1999 年」

している[14)]。

サードプレイスは世界中で様々な形で存在し、文化や地域に応じて異なる特徴がある。

例えば米国においては、サードプレイスの代表例としてコーヒーショップやブックカフェが挙げられる。特にスターバックスはその代表的な存在であり、仕事や友人との会合、リラックスの場として機能している。また、英国ではパブがサードプレイスとしての役割を果たしている。地元の住民が集まり、くつろぎの雰囲気で会話を楽しむ場として成り立っているのだ。

これらの例は、それぞれの国や文化において、地域社会の特性や価値観が反映され、サードプレイスが多様な形で機能していることを示している。日本の例については小林らが交流を主な目的とする交流型と、他人を気にせず個人で居心地よく過ごすマイプレイス型の 2 種類に区分できると指摘している[15)]。

個人主義化が進む日本の郊外の街での問題には、いくつかの要因が関与している。特に、高齢化や核家族化、都市への通勤圏拡大などが顕著だ。しかし、サードプレイスを通じたまちづくりが、これらの問題に対処し、コミュニティの一体感を再構築する手段となり得るのではないだろうか。

郊外の街で個人主義化が進むことによる弊害は大きく 2 点ある。1 点目は孤立感の増大である。個人主義化が進むと、住民同士の交流が減少し、孤立感が増大する。これにより、地域コミュニティの弱体化が進行するのだ。2 点目は地域の結びつきの低下である。住民がお互いに顔を知らず、近隣住人とのコミュニケーションが少なくなると、地域の結びつきが低下し、地元の協力関係が弱まる。こうした孤立感の増大や結びつきの低下は悪循環を生み、地域の個人主義化を加速させる。

この地域コミュニティの弱体化や結びつきの低下に対処するのがサードプレイスである。サードプレイスとして喫茶店、公園、コワーキングスペースなどの共有空間を整備し、住民が気軽に集まり、交流できる居場所を提供する。こうして地域の生活者同士で交流が生まれることで、個人主義化が進んでいる地域において、地域の繋がりを復活させることが出来るのだ。

サードプレイスにおいて実現できるのは以下の 4 点だ。

1 点目は、コミュニティイベントの開催である。定期的なコミュニティイベントやワークショップを開催することで、住民同士が顔を合わせ、共通の趣味や興味を共有できる機会を

[14)] レイ・オルデンバーグ著；忠平美幸訳「サードプレイス-コミュニティの核になる『とびきり居心地よい場所』」みすず書房，2013 より

[15)] 小林重人,山田広明「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 ：石川県能美市の非常設型「ひょっこりカフェ」を事例として」地域活性学会 地域活性研究 5 巻，2014 より

設ける。これは近隣住民同士のコミュニケーションのきっかけとなる。

2 点目は、地域の歴史や文化の共有だ。地域の歴史や文化を活かしたプロジェクトやイベントを通じて、住民が地元に誇りを持ち、その共通項を通して一体感を醸成する。シビックプライドを醸成するためにも、地域のアイデンティティを育むことが重要だ。

3 点目は地域協力の促進だ。地域住民が協力しやすい環境を整える。共同のプロジェクトや課題解決活動を通じて、住民が協力することで、地域全体のつながりを再確認することが出来る。

4 点目は情報共有の促進だ。地域の情報共有をサポートするプラットフォームやコミュニケーションツールを導入することで、住民同士のコミュニケーションを活発化させることが出来る。この拠点としてサードプレイスは有意義に使うことが出来る。

これらが実現することにより、サードプレイスを通したまちづくりは、個人主義化の問題に取り組み、地域社会の活性化と一体感の向上をもたらすだろう。特に 3,4 点目は阪神淡路大震災を機に注目された、地域防災に直接的に関わるものであるため大事にすべき取り組みである。こうした地域連携の取り組みは、シビックプライドの醸成にも繋がり、選ばれる街として成立していくのだ。

前節から見てきた社会変化から、地域活性化、生活者同士の繋がりの強化がまちづくりのテーマとなっていることが分かった。官民問わず、地域のコミュニティ醸成や生活者同士の交流拠点の整備が行われるようになり、「作られる街」ではなく、「育つ街」として生活者起点の街づくりが浸透しつつある。

例を挙げると、自社沿線都市開発を行う小田急電鉄が手掛けた「下北線路街」[16]という開発では企業側(ここでは小田急電鉄)がトップダウン的に開発を行うのではなく、開発を通じて街を支援することがコンセプトとなっている。これはホームページでも

> 私たち小田急電鉄が当開発[下北線路街のこと：筆者注]においてテーマにしたのが、「支援型開発＝サーバント・デベロップメント」です。“何かを変える”のではなく、開発を通じて街を“支援する”。そんな想いを、この言葉(「BE YOU」という事業コンセプト)に託しています。[17]

と示されている。このコンセプトは開発して終わるのではなく、その先の生活者一人ひとりまで意識が向くような事業が行われていると指摘できる。

---

[16] 小田急電鉄の開発事例。小田急線「東北沢駅」～「世田谷代田駅」の地下化に伴い再開発された街。

[17] 下北線路街「下北線路街とは？」より
(https://senrogai.com/) (2023/12/12 閲覧)

また「WISE Living Lab さんかく BASE」[18]（横浜市青葉区）は、「次世代郊外まちづくり」の情報発信や活動拠点として整備された施設だ。本施設は図 2 に示した「次世代郊外まちづくり」が目指すまちの将来像「WISE City」（ワイズシティ）[19]の体現に向けた機能が導入される 3 棟の建物から構成されている。



図 2. WISE CITY のイメージ

「PEOPLEWISE CAFE」は、「まちのカフェ」がテーマとなっておりワークショップやパーティーなどのイベントにも利用できるようになっている。室内のレイアウトは可変性が持たされていて、1 人から友達や家族などグループまで「ちょっといい、日常」を楽しむことが出来る空間だ。実際に 2023 年度もハロウィンなどの季節ごとのイベントから地域発信のワークショップまで様々な催しで利用されている。筆者が現地を訪れた際にも、平日昼間にもかかわらず店内は賑わいを見せていた。グループで会話に華が咲き、お客さんが入店した際に既にカフェに入っていた人が顔を上げ「久しぶり！」と声を交わすような常連同士のコミュニティも確認できた。

「PEOPLEWISE CAFE」は、住宅地と駅の間にあり、人の流れの中にあるため、アクセスの面で優れている。また、イベントが行われることで地域の人々が定期的に訪れる場である。会員制などではないため誰でも気軽に立ち寄ることが出来る一方で、しばしば現れる常連も存在している。これらは、レイ・オルデンバーグの提唱した「サードプレイス」の要件であり、「PEOPLEWISE CAFE」は「まちのカフェ」として地域のサードプレイスとしての役割を果たしているのだ。

このようにまちづくりの形は時代の変化に合わせて変容してきた。制度や仕組みが中央集権型から自律分散型へと変化していく中で、街も自律分散型都市へと変革が始まっている。生活者一人ひとりの個性やウェルビーイングのために、生活者起点のボトムアップのま

---

[18]「次世代郊外まちづくり」の情報発信や活動拠点として整備された施設。

[19] 東急(株)公式 HP「東急株式会社の街と住まい-次世代郊外まちづくり WISE CITY」より引用（https://www.109sumai.com/development/wisecity.html）（2023/12/12 閲覧）

ちづくりが求められているのだ。地域に興味を持ち、地域のアセットを活用することで自分たちがどうしていきたいかという問いに応えていくのがこれからのまちづくりであり、サードプレイスを舞台とした地域コミュニティで行われるものではないだろうか

2.3. まちづくりに関するまとめ

前項まででは郊外に広がる個人主義と地域の愛着醸成の必要性を学び、シビックプライドやサードプレイスといったまちづくりの新しい考え方を確認した。筆者は自身がまちづくりに関わる中で、街のコミュニティに居場所が不足しており、地域住民の活動参加に影響を与えていると感じた。ここで、筆者が居場所づくりの観点から注目したのは鍵である。事務所の鍵を受け取ったときに事務所に居場所を感じ、よく利用するようになった経験から鍵と居場所の関係について興味を持ったのだ。ここからは鍵とそれにまつわる文化の先行研究について考察していく。

2.4. 鍵の信頼感の変遷

2.4.1. 鍵の文化

鍵は、人が家の扉や、倉庫、金庫などを施錠する際、車や機械を動かす際を動かす際など日常の様々な場面で用いられる。しかしその実用面での性格は大きく二つに分類される。まず 1 点目は、所謂「鍵を閉める」という言葉で表されるような「施錠」の行動である。家や大事なものを他者から分離し維持するため、鍵が用いられる。加藤は論文の中で「私達は様々な鍵によって、ある空間を閉鎖したり、閉鎖された空間の境界を越えたりしながら生活を送っている」[20]としたうえで「私達は鍵をかけることによって見知らぬ他者から自らの所有する財産や土地を守っている」[21]と指摘している。ここで指摘されているように、自らの財産を他者から切り離し、固定化させるために「施錠」という行為が行われている。

鍵の性格の 2 点目は、車や機械を動かす際などのスイッチや使用許可の意味で用いられる。これは 1 点目の「閉鎖」に対して「開放」と表現できる効用だ。近年の乗用車はボタン始動式の車が増えたが、従来、車の鍵がそのままエンジンの始動スイッチになっている例は多い。また、工場などの機械も、特に危険を伴うものや資格が必要なものについては始動に鍵を必要とする物が多い。これらの鍵は制限を取り払うという意味で「開放」と分類できる。

---

[20] 加藤秀雄「鍵あるいは錠の文化史的研究のためにーテクストとフィールドに見るその象徴性一」常民文化（31), 25-44, 2008-03, p.26 より

[21]加藤秀雄，同書，p.26 より

しかし、この二点は共通する性格も持つ。それは「所有」の意識と繋がっているという点だ。前者の「閉鎖」は自己の所有するものを他者から分離すると言い換えられる。また逆に「鍵を閉める」こともあれば「鍵を開く」こともあるため、そこに着目すれば 2 点目と共通した意味を持つと捉えられる。2 点目の「開放」は「鍵を持つ=使用出来る」という点で、鍵に所有の意味が付与されている。加藤も、「現代社会におけるそれ（閉鎖や施錠のこと）は排他性によって「私＜の＞〜」、或いは「私達＜の＞〜」を他者の侵入から守るという「所有」の概念と密接に結びついたもの」[22]だと指摘している。

この「所有」という意識は、鍵にその実用性以上の象徴性を持たせる。加藤は、歴史的な象徴的側面について触れている。『万葉集』に登場する鍵にまつわる物語を引用し、妻との別れ話もしないままに隣家の主人が美貌の珠名に鍵を渡してしまっているという記述から妻として迎え入れられる女性の立場や権利は家の鍵によって保証されており、これを男性が渡すことには、求婚行為として象徴的な意味があると見ることが出来る [23]と指摘している。家を「所有」しているという意識が、それを利用するために必要な鍵に転嫁され、鍵を渡すことが同じ家を共有すること、つまり求婚行為であるという認識が「鍵を渡す」という行為に付与されているのである。

ここでは家の「所有」と婚姻関係について触れたが、そのほかにも鍵の機能に基づく象徴的な意味が付与された例がみられる。歴史的な鍵の文化の変遷は本論と逸れるので深堀りはしないが、代わりに次節では現代にも残る象徴的側面について加藤の論文に触れながら考察していく。

2.4.2. 鍵の象徴性

鍵は「施錠」という行為そのものが持つ、領域の分離や固定化という特性、また鍵を扱う特権性から、それにちなんだ象徴性が付与されてきた。加藤は静岡県にある白山神社 [24]の年中行事を取り上げ、神社にまつられているオカゲサマという鍵が重要な意味付けを与えられていることを指摘している。

オカゲサマの性格がただ神社の鍵という以上に禰宜番の権威を保証するという、前節でみたような主婦権や行政権と鍵の関係のような象徴性を強く持っている点が挙げられる。「これは、神社の鍵を持つということが、その宮座における祭祀権を有すると捉えられてい

---

[22] 加藤秀雄，同書，p.26 より

[23] 加藤秀雄，同書，p.29 より

[24] 静岡県三ケ日町津ヶ崎にある神社。年中行事でオカゲサマと呼ばれる鍵を扱う。

ることに由来すると考えられる。」[25]としたうえで、「私達は鍵を財産を守るためのツールであると捉えがちであるが、神社に施錠を行うこと、開錠することには財産を守るというよりも、ハレとケの境界を越境するという性格の方が強い。(中略)共同体における秩序を維持するという「開かれた施錠」とでもいうべきものであろう。」[26]と論じている。

このような信仰のなかの鍵は、現代社会でも通用する意識である。2022 年に公開された新海誠監督の映画『すずめの戸締り』[27]が記憶に新しい。この物語はフィクションではあるが、日本の現実の災害を取り上げながら日本の土着信仰を模した世界観で描かれている。この脚本からは、日本人の鍵(とそれに付随する扉)に対する捉え方が現れていると考えた。物語では、好奇心から災いに巻き込まれた主人公が、各地を転々としながら災いの元となった扉を鍵で閉め鎮静化していく。この扉は物語では「後ろ戸」と呼ばれ今世と常世を繋ぐ扉であった。

今世と常世は、まさに加藤も指摘した「ハレとケの境界」である。『すずめの戸締り』に登場する鍵は白山神社におけるオカゲサマと同じような神格的な象徴性を持ち合わせていると指摘出来る。

また、主人公は本来鍵を持つべき人間ではなく、「後ろ戸」を閉めるのは「閉じ師」と呼ばれる代々伝わる一族の仕事であった。これが主人公にも許されたのは、一族の一人から鍵を託されたからだ。ここから鍵の受け渡しとともに権威が受け渡された様子が読み取れるのではないだろうか。

また、現代において鍵には『すずめの戸締り』で見られたような権威の代替物という意味だけではなく、様々な施錠対象のメタファーとしての意味付けがされる傾向にある。

宮城県にある大師山法楽寺[28]では、『願掛けカギ供養』を行っている。これは、廃車になった車の鍵や、引っ越す前の家の鍵など、必要なくなったがお世話になったものにお礼の気持ちを捧げるために行われているものである。特に、事故などで廃車になった車や火災でなくなった家などは、所有者の望む別れが出来ていないことが想像される。このようなときに、これまでお世話になったものの象徴物として鍵を供養し、これから長い付き合いとなる新しい車や家での幸せを願うという願掛けの方法がこの供養である。

加藤はこれに対し、「鍵がただ施錠されたものを開くためのツールであるという以上に、施錠された対象と不可分の関係を有していると見做す人々の心象が見えてくる」[29]と指摘

---

[25] 加藤秀雄，同書，p.34 より

[26] 加藤秀雄，同書，p.34 より

[27] 2022 年に公開された日本のアニメーション映画。新海誠監督。

[28] 宮城県黒川郡大和町にある寺。ペット供養やカギ供養を行う。

[29] 加藤秀雄，同書，p.36 より

している。

このように鍵には、道具としての用途を超えて、使用する人や対象物の関係を固定化する象徴性があることが見て取れた。同じ鍵を受け渡すことによって、権威や権利も移動するという点は特にこの象徴性が顕著である。またこの意識は現在まで続いており、現代人も同じ意識をもっていることが特筆できる。

2.5. 関連動向のまとめ

本章では、まず現代の郊外の街で起きている社会変化について考察した。郊外の街に起きている地域住民の高齢化、個人主義化、建物の老朽化などの問題点に触れた後、その解決策とも目されているサードプレイスについて理解を深めた。

郊外の街では、高齢化や個人主義化の影響で地域の結びつきが弱くなっていることを指摘した。かつての井戸端会議という言葉に現れるような路上でのコミュニケーションは格段に減り、街が寝るためだけの場所として消費されるようになったのだ。

この問題の根幹にあるのは、地域住民の街への愛着の薄れである。寝るためだけの街に興味を持つ人は減り、街への愛着もなくなっていった。そこで、この社会変化に対応した、新たな地域拠点の考え方がサードプレイスである。家や学校ではなく、それ以外の居心地の良い場所のことである。

このシビックプライドの醸成のためには、地域に「興味」を持ってもらう必要がある。この「興味」を生むための新たな地域拠点の考え方がサードプレイスである。これは家や学校ではなく、それ以外の居心地の良い場所を指す。

サードプレイスでは、自然に人が集まり、そこで交流が生まれることでそれまで知らなかった地域住民の声を聴くことが出来る。さらには街を知ることによって、同じ街に住んでいるというシビックプライドが醸成され街への愛着に繋がる。こうして地域の繋がりを取り戻すのが、近年のまちづくりである。

そして次に、鍵と人間の歴史や文化について理解を深めた。鍵の性格は「鍵を閉める」という「閉鎖」行為と、鍵を渡すことによる「使用許可」の意味で「開放」の二つが存在する。そして、これらは「所有」という文脈で共通する性格を持つことを確認した。これらの鍵の性格は、鍵の持つ象徴性にも繋がる。

鍵は対象の代替物として象徴的な機能を果たすのだ。「施錠」という行為からは、領域分離や固定化という特性より、神格的な意味付けをされてきたことを確認した。これは現代にも残る静岡県白山神社の風習などから読み取ることが出来る。また「使用許可」の意味から、施錠対象物との不可分な関係を確認した。鍵には道具としての用途を超えて権威や感情が刷り込まれることがあるのだ。鍵を所持することによって所持者に権威が移ることや、車や家の鍵が対称そのものと同じ扱いをされることから、鍵に対する人の信頼が見て取れる。

筆者はまちづくりの中の、まちづくり活動について 3 つの問題意識を持っている。

① 発言や投書など、意見表明の方法が言葉に頼っていること

② 活動が継続的でないこと

③ 活動が排他的になってしまう

の 3 点である。これらの中で特に②と③は、まちづくり活動を行うコミュニティの中に一体感や帰属意識がないことが問題であると言い換えることが出来る。そこで筆者は、一体感を生むために共通の経験や文化を醸成し、同じ経験を共有することで帰属意識が生まれ一体感や居場所であるという実感を生むことに興味を持っている。

2.5.1. 作品への展望

シビックプライドの醸成のためには街への「愛着」が重要であり、街への「愛着」や一体感を生むためには、街や地域に住む他者への「興味」が必要である。近年のまちづくりでは個人に焦点をあて地域から魅力を発信することで、この「興味」を育ませている。しかし、まだ街に興味を持っていない人は大勢いる。街や集団に共通のモチーフを育み、同じものを共有することでより一体感を持って取り組めるのではないだろうか。それが筆者がまちづくりをテーマに作品作りをする原動力である。

3. 予備実験

3.1.　これまでの制作について

『Manipulatable Machi Module』は、香山千晴さん・野島亘貴さん・平井将貴さん・渡部拓真さんらとともに早稲田大学文化構想学部『ままま展』[30]で展示をした作品である(図 3)。本展示は 2023 年 1 月 21 日から 22 日まで高田馬場にある「BaBaBa」で開催され、本学生だけでなく一般のお客様も来場した。

作品のタイトル『Manipulatable Machi Module』は、操作可能という意味の「Manipulatable」と日本語の「まち」、風景の一部を切り出した模型という意味で「Module」を掛け合わせた造語である。本作品では模型で戸山キャンパスを再現し、その一部を組み換え可能なものにした。模型にすることにより、人に伝えることが難しい場合でも自分の手で組み替えることで街に対する意見表明することを可能にした。来場者は日頃の経験や当日の印象でその模型の街を手で組み替えることによって自分の理想の街の形をデザインできるのだ。

組み替えられていくことによる作品の変化は図 4 のように写真として蓄積される。この記録は、これまでの参加者がどのような街を構想してきたかを知る手助けとなり、街の声として参加者の意見を集約している。

本作品はまちづくりへの参加ハードルを下げることをテーマにしており、言葉ではないコミュニケーションを通して街への意見を集めることを目指している。また、街を模型として眺めることで改めて興味関心を持つことを目指した。展示は 200 人を超える方に来場いただき、作品にも多くの方が参加してくださった。

[30] 2022 年度発酵メディア研究ゼミ展示。高田馬場の BaBaBa で行われた。



図 3 Manipulatable Machi Module

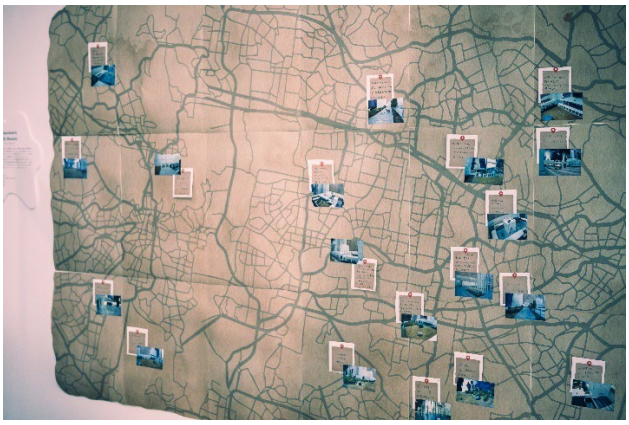


図 4. マップ(写真が蓄積されていく)

3.2. 予備実験概要

『Fertile Machi』は、筆者が早稲田大学文化構想学部『発酵メディア研究ゼミ夏展示〜発酵始まりました〜』で展示をした作品である。本展示は 2023 年 7 月 15 日から 16 日まで早稲田大学戸山キャンパスで開催され、本学生だけでなく一般のお客様も来場した。

作品のタイトル『Fertile Machi』は、肥沃なという意味の「Fertile」と日本語の「まち」を掛け合わせた造語である。本作品は参加型の作品で、来場者にそれぞれが感じる豊かさが何であるかを問い、回答を集めた。街を肥沃な土壌として捉え、豊かさを養分として同じ樹が育つ街をテーマに「まちを育てる」という意識の共有を意図している。

なお、来場者から意見を集める形式は、先述の『Manipulatable Machi Module』[31)]から引き継いでいる。

3.3. 制作動機

3.3.1. 街への興味の醸成

まちづくりの問題点はそれだけではない。前章でも触れた個人主義の進展により、そもそも街に興味を持たない人が増加しているのだ。ここに問題意識を持ったのが今回の『Fertile Machi』である。

前章で触れたように、街のシビックプライド醸成には、街への愛着が重要である。しかし、それ以前の興味すら持っておらず、まちづくりの当事者意識の無い人がまだ多くいる。この当事者意識を持ち、街に興味を持ってもらうことが、まちづくりの第一歩ではないだろうか。

また、地域住民同士の繋がりが少なくなっていることも問題である。個人主義が広まるなかで、身の回りの他者の声に耳を傾ける機会を作るべきだと考えた。これには意見を見えるようにすることが最も効果的である。他者の意見を目の当たりにすることによって初めて他者の存在を確かめることが出来るのだ。

3.3.2. 仮説

以上のことから 3 点のテーマを構想した。

①街の生活者として当事者意識を持たせること、

②①を通して参加者に一体感を持たせること、

③街に住む他者の存在を確かめること

---

31) 筆者が香山千晴さん・野島亘貴さん・平井将貴さん・渡部拓真さんらとともに制作した作品。手で動かすまちづくりをテーマにしている。

の 3 点である。これらのテーマを通して、疑似的に街の住民になり、その場で多くの意見を目にすることによって、実際に自身が住んでいる街でのまちづくりや地域住民との関わり方について再考する機会になるのではないかという仮説を立てた。

このテーマに沿って制作を行う上で、まずは一体感を持たせるために共通のモチーフを設定することにした。筆者は「豊かさ」という言葉を取り上げ、①人間の「豊かさ」②自然の「豊かさ」という二面性を指摘した。筆者はここで人が豊かになれば自然も豊かになる世界を想起し、この方向性の違う二つの「豊かさ」を利用してみようと考えたのだ。そして、1 つの街と 1 つの樹という構図に至り、1 つの樹を街の「豊かさ」の象徴として見立てた。

鑑賞者は同じ樹を共有する街の生活者として本作品に参加し、樹は彼らを繋ぐ「豊かさ」のモチーフとして扱われる。このように同じものを共有することによって、一体感やアイデンティティが生まれるのではないかというのが筆者の考えだ。これは前章で扱ったシビックプライドとも換言することが出来る。さらにテーマの③については、作品内に意見を意見をそのまま展示するシステムで参加者の意見を来場者に見えるようにした。鑑賞者は、同じ樹の下の 1 人として、地域の生活者の意見を目の当たりにすることで、同じ街でも多様な考え方を持った人がいることを想起する。

こうして、「都市の豊かさを養分として樹が育つ」世界を構想し、それを客観的に見てもらうために俯瞰できるミニチュアのような形で制作した。具体的な作品内容については後述する。

3.4. 作品の制作過程

『Fertile Machi』のコンセプトである、「都市の豊かさを養分として樹が育つ」が基づき、作品を構想した。作品は主に 3 パートに分けられ、それぞれ植物パート、建物パート、参加型パートである。予算の中でやりくりするため、コンセプトと照らし合わせながらこれらは全てホームセンターで購入した。

3.4.1. 樹について

まず、主題となる樹の部分は、わかりやすさを重視して本物の植物を利用した。展示期間の 2 日と前後 1 日の計 4 日間展示室に置かれるため、ある程度水分や日照不足に対する耐久力がある必要があった。また、本作品のコンセプトに沿って建物から養分を吸収して

いる様子を表現するため、ガジュマルのような根が露出し複数に枝分かれしているような室内向け観葉植物が適していると考えた。

以上の要素を兼ね備えた植物を予算の範疇で検討した結果、パキラを採用することにした。パキラは日光を好むが、直射日光は必要としないため、太陽光が取り込まれ室内が明るい本会場に適していると考えた。また、本物の植物を採用したことに伴い、地面の再現は園芸用の土を利用した。実際の様子を図 3 に示す。[32)]



図 5.Fertile Machi の植物パート

3.4.2. 建物などについて

街をコンセプトにしていることから、建物の再現も必要だった。建物はイメージとして展示を行うのみで特に会期中に動かす必要はなかったため、耐久力は重視せず図 4 のように工作用紙で製作した[33)]。建物から養分を吸収しているイメージとするため、パキラの植木鉢の周りを囲うように外壁を置くことで、建物から樹が生えている様子を再現した。ま

32) 2023 年度発酵メディア研究ゼミ夏展示にて筆者撮影

33) 2023 年度発酵メディア研究ゼミ夏展示にて筆者撮影

た、建物は養分にされているイメージを再現するため、市販のジオラマ用素材を用いて、図 5 のように苔むした壁を再現した [34)]。なお、土壌に塗料が溶け出すようなことを防ぐため、建物に塗装は行わなかった。

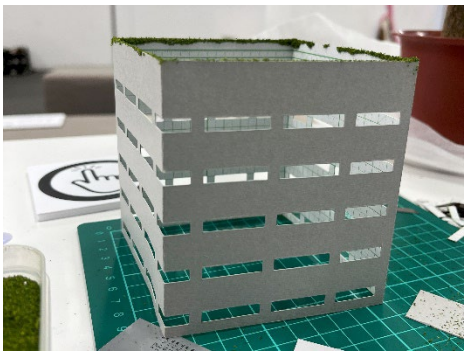


図 6. 制作中の外壁



図 7. 壁が苔むした建物

3.4.3. 鑑賞者の参加について

参加型パートは、「街の声」として参加者に自分の意見を書いてもらうためのセクションである。ここでは、意見を書いてもらうため紙とペンを用意する必要があった。図 6 のように地面に刺す、建物に括りつけるなどの用途を想定し、針金付きの名札を用いた [35)]。

34)筆者撮影

35) 2023 年度発酵メディア研究ゼミ夏展示にて筆者撮影

さらに、街に住むという体験性を向上させるために、いくつか建物に見立てた付属品も用意した。図 7 のように植え替え用の土に還る簡易ポットを逆さに利用し、窓に見立てた穴をあけることで住居らしさを演出した[36)]。



図 8. 意見を書くために用いた名札



図 9. 住居に見立てた植え替え用ポット

3.4.4. 制作まとめ

36) 2023 年度発酵メディア研究ゼミ夏展示にて筆者撮影

こうして、樹を中心としたミニチュアの街を制作した。参加者が集まるにつれて、樹の周りには意見が集まり、「街の声」が聞こえるような風景が想像された。この集団の意見を目にするという体験から、自身の街との関わり方を見直すきっかけになることを望んでいる。

3.5.　作品の詳細

本作品はまちでの過ごし方や自身の考える豊かさについて問い、意見が集まっていく様子を可視化する展示である。

鑑賞者はまず、建物から樹が生えている様子を目の当たりにする。その様子は屋上菜園の域を超えていて、まるで冬虫夏草のようでもあり、建築に詳しい人ならミラノやスイス、中国の南京に建設された『Vertical Forest（垂直森林)』[37)]を想起する人もいるだろう。

キャプションやポスターから参加者に問いかけるメッセージは「まちの豊かさを養分にして成長する樹があるとしたら『あなた(鑑賞者)はそこで何をしたいですか？』」「あなたの住処を栄養として、どんな樹を育てたいですか？」とした。図８としてに実際に用いたボードのデザインを示す。参加者は、まず他人の意見を目の当たりにし、自分のバックグラウンドや意見に沿って回答していく。

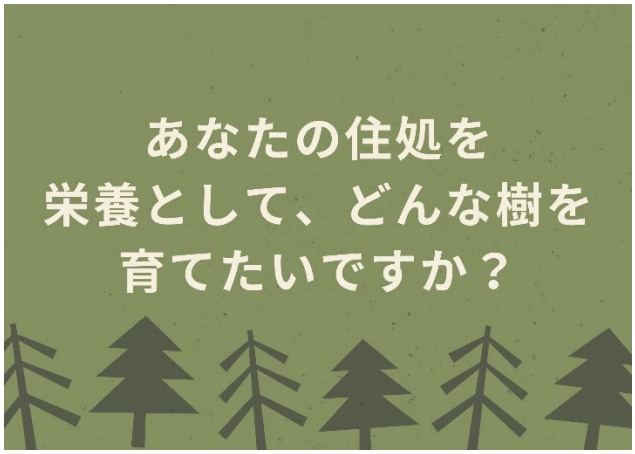


図 10.　参加者に向けたボード

意見は時間が経つにつれて「街の声」として作品の中に蓄積していく。ある意見と同じ回答の人がいれば、それに触発されて違う意見が対抗していくこともある。集まった意見が見えることによって、自分の中の固定観念や他者の存在に気づかされることを意図している。

[37)] Stefano Boeri 氏設計のサステナブル集合住宅。

集まった意見たちを見ることによって、それまで隠れていた集団の中の多様性に気付くきっかけになる。それとともに、街の豊かさを養分に樹が育つというテーマは、生活者それぞれ同じ街を育てているというメタファーとして、生活者起点で街を作ることを想起させる。

3.6. 作品の評価

この作品の特徴的な点は、ファンタジー性がある点である。人間の豊かさを養分に建物から植物が生えるというのは現実ではありえない。そのため、この世界観を参加者に理解してもらうことが課題だった。また、この作品は展示の都合上、適正な事前事後インタビューを行うことが出来なかった。そのため綿密な参加者の調査と評価が出来ないことをご留意願いたい。

3.6.1. 仮説に関する考察

制作にあたり、テーマとしたのは①街の生活者として当事者意識、②①を通した一体感の醸成③他者の存在の認識、の 3 点である。また、疑似的に街の住民になり、その場で多くの意見を目にすることによって、実際に自身が住んでいる街でのまちづくりや地域住民との関わり方について再考する機会になったか（④とする）という確認も行う。

まず①についてである。生活者としての当事者意識が生まれたかということについては、疑似的に街の住民になり、「街を変えたい」など意見を持つことである。これは、『Fertile Machi』の生活者としてこの街でどう過ごしたいかを考えることで、達成していると考えられる。

次に②についてである。その街の一員として、自分がどう生きるか考えるのが②の要素だ。決して人のために生きることだけが正解ではないが、30 番の「他の木を助ける木になって朽ちたら種を落としてほしい」は持続的な街になってほしいという願いが込められており、特に②の要素を満たしている。

次に③についてである。街の中には自分以外の他者が大勢いるが、個人主義が進む郊外で生活する上で他者の生活や意見に触れる機会は少なく忘れてしまいがちである。『Fertile Machi』では作品に集まった他者の意見を目の当たりにすることで、他者の考えに触れることが出来る。

最後に④についてである。事後インタビューが出来ていないため、正確に測ることは出来ていない。しかし、5 番の回答「植物と同じ方向を向いた人間の暮らしに憧れました。」のように、自分たちの暮らしを見直すことで達成することが出来る。

Fertile Machi	意見	場所	日付
1	Nepenthes lowii	土	
2	この木の下でおいしいお茶を飲みたい	土	
3	みんなが安らげるやさしい安心感のある木になってほしい。	土	
4	自然に触れられる場所がちかくにあるところに住みたい！	土	
5	植物と同じ方向を向いた人間の暮らしに憧れました。	土	
6	○の中のデッカイ幹が広がって、隣人の家にまで広がって、あわよくば隣人と暮らしたい	土	
7	おいしいモモをいっぱい食べたい。	土	2日目
8	長い時間をかけて大きく成長する樹を育てたい	土	2日目
9	こけをながめてたい	土	2日目
10	となりの人の生活音が聞こえない土地でくらしたい	土	2日目
11	キウイがなる樹	土	2日目
12	ミラーボールが実る樹の下で暮らしたい	竹ひご	
13	タイガ地域が街に一区画欲しい	竹ひご	
14	木の根のそばに住みたい。	竹ひご	
15	せいけつだけど青々としげった家にすみたい	竹ひご	
16	家が自然に還ってほしいけど虫はきらい	竹ひご	
17	木の根のそばに住みたい。雨風をしのげるから。	住居	
18	大きな葉っぱの下で暮らしたい！	住居	
19	ツリーハウスで暮らしてみたい！	住居	
20	人の距離が近いところに住みたい近くに自然があるとなお良い	住居	
21	自然の時間推移に身を置きたい	住居	
22	冬に負けないブドウがほしい	住居	2日目
23	バオバブの木	住居	2日目
24	鳥の声が聞こえるテラスがほしい！	住居	2日目
25	思い通りにならない樹とくらしたい	住居	2日目
26	ぽかぽかを栄養にしてひるねできるはっぱをはやす木	住居	2日目
27	季節関係なく色々なフルーツが食べたい！	住居	2日目
28	まちを持続させるために何が不足しているか教えてくれる樹	住居	2日目
29	見ると安心できるぶっとい樹	樹	
30	他の木を助ける木になって朽ちたら種を落としてほしい	樹	
31	永遠に米が作れる種	樹	
32	根元が一番安心するわー	樹	
33	樹齢がとにかく長い樹	樹	
34	葉の上で寝てたい	樹	2日目
35	ツリーハウスで暮らしたい！	樹	2日目
36	日本の夏が涼しい世界線	樹	2日目
37	桜の樹の下で永遠に読書したいあとYouTube　おいしいごはん	建物	
38	金のなる樹が欲しい	建物	
39	びわの木　エンドレス　びわびわ茶？ひれ酒	建物	2日目

表 1. Fertile Machi 集計結果

3.6.2. 反省と改善点

『Fertile Machi』では、考察で触れたように多くの参加者から 40 近い意見を受け取り、街に対する当事者意識を高め関わり方を再考するきっかけになったと考えられる。しかし、筆者が用意した「まちの豊かさを養分にして成長する樹があるとしたら『あなた(鑑賞者)はそこで何をしたいですか？』」「あなたの住処を栄養として、どんな樹を育てたいですか？」は、独特な世界観とともに、ファンタジーなのかリアルなのかわからず、来場者を混乱させてしまった。その結果、回答に一貫性がなく、植物のある街で過ごすのか植物はあくまでメタファーで街の豊かな過ごし方について問うているのかあいまいな展示となってしまった点が反省点である。

3.7.　作品の展開

本作品では、①街の生活者として当事者意識を持たせること、②①を通して参加者に一体感を持たせること、③街に住む他者の存在を確かめること　の 3 点をテーマに制作・展示をしてきた。街への関わり方の再考を喚起できた一方で、筆者が抱えている「発言や投書など、意見表明の方法が言葉に頼っていること」「活動が継続的でないこと」「活動が排他的になってしまう」などに対する解決策は示すことが出来ていない。

次章からは、まちづくり活動のコミュニティにおける居場所づくりについて考察し、オープンで継続的な活動が出来る取り組みを考察していく。

4. 本実験

4.1.　実験案の検討

第二章では郊外の街の社会変化を経て、地域の結びつきが弱くなっていることを確認した。地域での繋がりが薄く共通の経験が少ない状態では、シビックプライドが醸成されにくい。筆者自身 10 年以上にわたり、横浜市に住み「次世代郊外まちづくり」運動の対象地域として学生時代を過ごしてきた。実際活動に参加する中で見えてきた、地域の努力と行政や企業の後援、そして課題を共有することで今後の活動の参考になるのではないかと考え、本研究を進めた。

筆者は、まちづくり活動についてより多くの人に参加してほしいと考えている。なぜなら、一部の人によって街の在り方が決定されていくことに違和感を持っているからだ。伊藤の研究では、「参画」を促すものとして「アイデンティティ」を挙げている [38)]。この「アイデンティティー」について、国立国語研究所は「自分が帰属する社会などを意識していう場合は、『帰属意識』ということができる」[39)]としている。筆者はこの帰属意識について、地域コミュニティにおいては 2 つの側面があると考えている。まず 1 点目は、街の住人としての帰属意識だ。これはシビックプライドとも言い換えることができ、前章で触れたように街を一つのコミュニティとして捉え、地域への「愛着」を通して醸成されるものだ。次に 2 番目は、まちづくり活動を行うコミュニティに対しての帰属意識だ。この帰属意識をもって初めて継続的な活動への参加が可能になる。

筆者はまちづくりにおける居場所や帰属意識について関心を抱いているが、中でもまちづくり活動を行うコミュニティに対しての帰属意識の醸成に注意を向けている。この帰属意識がないと、まちづくり活動に参加をしても居場所がなく居心地の悪い思いをして活動が続かなくなってしまう。実際、筆者の家族や友人で、この居心地の悪さが理由で活動の参加をやめてしまったという声を聞いた。そこで、この印象を改善できる取り組みを探している。つまり、常連を確保しつつも、排他的にならず、常にオープンな環境を追求しているのだ。

[38)] 伊藤香織「シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素 富山市中心市街地と富山地域を事例として」日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.54 No.3，2019

[39)] 国立国語研究所「アイデンティティー」
(https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian1_4/Words/identity.gen.html) (2023/12/13 閲覧)

本研究は、まちづくり活動の①参加のハードルを下げること②集団への帰属意識を生まれやすくすることをテーマにサードプレイスでのコミュニティ醸成の方法を探るものである。筆者は、本来意識を高める方法として、鍵に注目した。前章で明らかにしたように、鍵は権威の象徴としての性格を持っており、鍵を渡されることは、そのコミュニティでの一定以上の信頼を表している。

筆者自身の体験として、サークルで借りている事務所の鍵を所持していたときに、自分の居場所であるという意識が芽生えたことが挙げられる。学校の近くにあることで利便性も良く、中ではもちろん作業することもあったが、しばしば用事もなく空き時間に訪れていた。しかし、事務所の移転に伴い合鍵が廃止された。新しい事務所もダイヤル式の南京錠で自由に出入りすることは出来るが、合鍵を持っていなかったことで足が遠のいてしまった。

このサークルでの経験から、鍵と居場所の関係について興味を持った。鍵を手にすることは、その対象である空間にアクセスする権利が付与されたのと同等の意味合いであり、それが手元にあることが居場所であるという意識を生むのではないだろうか。ここで得た興味とまちづくり活動参加に対する問題意識を掛け合わせ、「空間の合鍵を集団で共有することで、その場所を居場所と思う意識が高まり交流が生まれるのではないか」という仮説を立てた。

なお、前章では鍵には財産を守り関係を固定化する性格があるということを明らかにした。この本来は鍵によって守られている空間が共有されることで、逆説的に他者の存在を自覚することが出来るのではないかという検証も行いたい。

4.2.　The Third Box の提案

「空間の合鍵を集団で共有することで、その場所を居場所と思う意識が高まり交流が生まれるのではないか」という仮説に基づき、実験案をまとめる。

4.2.1.　条件と実験案の整理

まず、本研究での鍵の役割としては

①集団からの信頼(許可証)を表す

②携帯することで実験を思い出すきっかけになる

③空間を自由に利用または出入りするためのもの

の 3 点にまとめられる。これらを実証するために必要な条件として

①居場所を実感してもらうための空間を用意する

②その空間の鍵を実験者同士で共有する

③帰属意識や参加者同士の信頼の醸成を測るため、複数日程の参加をすること

があげられた。この条件の中で実験案を検討したが、①と②の条件を満たす「部屋の合鍵の共有」は、防犯性の観点から鍵の複製の許可取りが困難であるという問題が想定されたため代替案を検討した。

代替案として、ボックスの鍵を共有する案を提案する。これは、ゼミで利用できる大学の映像関係共通室(以下、共通室)を使い、その中に鍵付きのボックスを置くものだ。ボックスの鍵を共有することで条件②を満たし、ボックスを置いている部屋を開放することで条件①を満たすと考えた。

実験参加人数については、一体感の醸成の過程を辿るため管理者を除き 3~4 名が適正であると考えた。人数を少なめに設定することで、個人の心境の変化を詳しく把握することを目指している。

本実験では本来、部屋の鍵を共有することで居場所の獲得、つまりサードプレイスの醸成を目指していた。実験内容の調整により、空間が部屋から鍵に移ったことで「第三の居場所」になぞらえて「第三の箱」として実験を進めることとした。そこで、ボックスの名前は「The Third Box」とした。空間が部屋からボックスへと変わってもこの意識を残しておこうと考えたからである。

4.2.2. 実験で扱うもの

本実験は、「The Third Box」を用いて、共通室をサードプレイスとして成り立たせることを目指して組み立てられた。構成するものは以下の通りである。

・共通室

実験は全て共通室で行った。鍵の管理は筆者が行い、日により前後はあったがおおむね 10 時から 17 時まで開室した。部屋の様子は図 9 に示す。

出入りは基本、文化構想学部の表象メディア論系の学生のみで、定期的に利用しているのは学内広報誌『Xett（セット）』の編集部のみである。



図 11. 共通室の様子

・The Third Box

300 ㎜四方の鍵付きボックスである。通信販売サイトで購入し、筆者が組み立てた。合鍵の関係で付属の鍵は使用せず、施錠には後述の南京錠を使用した。

中にはボックスの使用例と居心地の向上を兼ねて、棚を 1 つ、お皿を 1 つ、Bluetooth 対応のスピーカー1 つ、ノート 1 冊、本を 3 冊と、人感センサー付きのライトを入れた。詳しくは図 10 を参照。

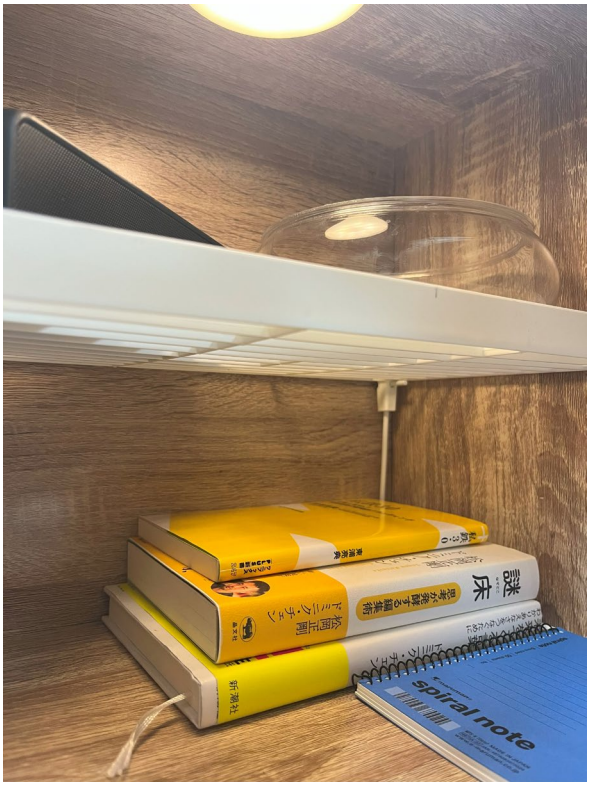


図 12. The Third Box 初期状態

・南京錠

購入したボックスの合鍵では数が足りなかったので、南京錠を購入した。取っ手を二つ取り付けそれぞれに結束バンドを結び、結束バンド同士を南京錠で結んだ。合鍵を制作できなかったため、南京錠を二つ用意し連続で繋げた。図 11 に示したようにつなぐことで、1 の鍵を持つ人も 2 の鍵を持つ人もボックスを開けられるようになっている。



図 13. 南京錠の仕組み

・鍵

南京錠に鍵が 3 つずつ付属していたため、プレートを取り付け、ナンバリングをした。（図？）大きさは 20 ㎜ほどで、一般的な家の鍵と比べると小ぶりである。参加者には一本ずつ配布し、家の鍵と一緒に所持してもらった。余ったものは筆者が管理した。



図 14. 鍵(灰色が 1 番、黒が 2 番)

・Instagram

その日のボックスの変化を記録するため、また 1 日来ることができなかった日があってもボックスの変化を知るために、Instagram のアカウントを制作し、毎日夜にストーリーでボックスの様子を投稿した。投稿を見てもらうことで、ボックスの事を思い出してもらうきっかけとした。



図 15. Instagram アカウント

5. 評価

5.1.　実験の日程と参加者

実験は、日曜日を除く 11 月 28 日から 12 月 4 日の 7 日間行い、筆者が集めた被験者 2 名が参加した。それぞれ実験の前後にインタビューを行い、実験を通して感じたことや実験中の行動を振り返ってもらった。

5.2.　実験結果

本節では『The Third Box』の利用実態をアンケートとインタビューを通して明らかにする。アンケート結果とインタビュー結果については付録として論文の最後に記載した。

5.2.1.　事前インタビューについて

事前アンケート・インタビューでは、主にサードプレイスについて知っているかと、サードプレイスを持っているか、鍵の共有について訊ねた。アンケートは全 9 問用意し、回答に沿って各々インタビューを行った。

事前アンケート項目では、まず「サードプレイスという言葉を知っていますか」という問いを立てた。当ゼミ内で話しているとサードプレイスという言葉の知名度は高くないと感じていたが、この問いに対しては 2 名とも「はい」と回答した。インタビューで訊ねると、A さんは、所属しているゼミでサードプレイスを扱うことがあり、子どもの居場所という文脈でサードプレイスについて考えたことがあると語った。B さんはサードプレイスについて授業で学んだ経験があると答えた。どちらも詳しく訊くと、早稲田大学文学学術院文化構想学部所属で教育学が専門の阿比留久美教授のゼミ・授業であることがわかった。筆者、A さん、B さんは同じ文化構想学部所属でありながらも、論系は全員異なっている。論系問わず、サードプレイスについて学ぶ機会があることがわかった。

続いて「あなたは、家や学校以外に居場所を感じるような場所はありますか」という「サードプレイスを持っているか」という質問に対しても、2 名とも「はい」と回答している。インタビューで訊ねると、A さんはサークルで借りている事務所に居場所意識を持っていた。B さんはアルバイト先のバックヤードがその役割を果たしていると語った。

次の「その場所を何故サードプレイスと感じているか」という質問についての回答では各々の居場所を感じる要素を読み取ることが出来た。

A さんは、事務所の引越しに携わったことでその居場所意識が芽生えたという。それまで旧事務所はあまり利用してこなかったことから、その場の成立に携わったことで居場所意識が成立したことが読み取れた。

B さんは、「自分が(その空間で)部外者じゃなくて自分がいてもいい」場所として、アルバイト先のバックヤードを挙げた。アルバイト先の仲間と会話することで居心地の良さを感じているようだ。

なお、アルバイト先は仕事場であるためセカンドプレイスだということも出来るが、オルデンバーグは、セカンドプレイスは自宅以外に長い時間を過ごす・学習や経済活動を行うため人間としての生活の糧を得るために欠かせない場所であると定義していることから、生計の独立していない大学生にとってのアルバイト先はセカンドプレイスではないとした[40)]。

サードプレイスの利用方法はさまざまであった。A さんは、作業や話し合う場として利用することが多いと語ったが、図書館や他の大学施設と異なる点として、「誰か来るとしてもサークルの人だから」と事務所に感じている安心感を語った。B さんはそれに対し基本お喋りをする場として利用していると語った。また、「自分が部外者じゃなくて自分がいてもいいっていうふうに感じられる」と、その場所に居場所を感じていることが読み取れた。

これらはそれぞれ、A さんは一人で考えるのが好き、B さんは皆と話すのが好きという個人の居心地の良さの違いが現れた結果だと考えられる。対して、参加者の中でサードプレイスを構成するものとしての共通点を 2 点指摘できる。

1 点目はプライバシーと制限だ。どちらの回答も、その場所に入るためには特定の条件が必要であり、他の一般の人が簡単に入れないようになっているのだ。A さんは暗証番号が必要で、サークルのメンバーしか入れない事務所。B さんの場合もアルバイト先は、一般の人は入れないようになっている。これにより、プライバシーが確保され、特定のグループに制限された場所として機能しているのだ。

---

40) Ray Oldenburg『The Great Good Place』Da Capo Press、1989 年

2 点目は友人との交流だ。どちらの回答も、友人やサークルの仲間との集まりや会話が特徴として挙げられている。A さんはサークルの事務所で作業しながらたまに来る友人と喋ることが、B さんはバイト先のバックヤードで仲間との会話が居心地の良さを生む要因となっている。これにより、居場所感が仲間意識や仲間との交流によって形成されていることが指摘できる。

「誰かと鍵を共有していますか」という質問に対しては、二人とも家の鍵を家族と共有しているという回答であった。またさらに筆者が重ねて訊ねた「その鍵は他人と共有できますか」という問いに対しては 2 名とも「いいえ」と答えた。

多くの人は防犯上関係のない他者とは鍵を共有せずに過ごしているため、この回答は自然なものだと考えられる。A さんはその理由について「自分に置き換えて考えたときに他人の家の鍵はいらない」と客観的な意見を語ってくれた。家の中というプライベート性の高い空間の鍵が共有できないことが分かった。対して、パブリック性の高い、レンタルスペースやコインロッカーなどの鍵は料金を支払ったり会員証を見せることで容易に借りたり共有することが出来る。インタビューを通してこの境界線がどこにあるのかという疑問を抱いた。

最後に、「同じ街や地域に住む人々で鍵を共有できるスペースがあれば利用したいですか」という問いを立てた。この問いに対し、A さんは「鍵を開けたら見ず知らずの人がいる環境が嫌だ。時間制にしてほしい。」とレンタルスペースのような使い方をイメージしたのに対し、B さんは「使ってみたい」しかし「行く目的がないと行かないかもしれない」とイベントの必要性を語った。

事前アンケートからは、サードプレイスという言葉を学習する機会があること、またサードプレイスのように感じる場所があっても、その実態は個人の「居心地の良さ」によって異なることが分かった。以上を踏まえた上で、鍵を共有する本実験によって参加者同士に一体感が芽生えるのか観察した。

5.2.2. 実験全体の流れ

本実験は、途中水曜日の午後の『Xett』の会議のタイミングと定休の日曜日を除いて会期に沿って滞りなく進んだ。表 1 に A さん B さんが参加した日付をまとめる。

	11/28	29	30	12/1	2	3	4	5
A	○	○	×	○	○		○	○

B	○	○	×	×	○		×	○

表 2. 参加者の参加日程

A さんはほぼ毎日参加し、比較的長い時間滞在していた。一方で B さんは授業などがある日に参加し、アルバイトと授業の間など隙間の時間に利用していた。また 2 人は 29 日に実際に顔を合わせている。

ボックスは毎日記録した。図 14 は筆者が撮影したボックスの様子である。それぞれお皿に入っているお菓子が変化している点、棚が入れ替わっている点、本が増えている点などが指摘できる。詳しくは事後インタビューに基づき解説する。



図 16. ボックスの様子(2 日目,4 日目,6 日目)

なお、Instagram アカウントについては更新を失念する日が多く、要素として成立しなかったため今後省いて考えるものとする。次節では事後インタビューに基づき本実験の結果をまとめる。

5.2.3. 事後インタビュー

実験終了後にそれぞれ個別でインタビューを行った。A さんと B さんの回答を軸に実験結果を確認する。

はじめに、箱がどのように使われたかを確認する。A さんは、箱の使用用途として「本棚, 物置」と回答した。入れた物も本や試験結果の紙など、物置としての利用が多かった。一方で B さんは使用用途として「宝箱, 交流の場」を挙げ、実際に相手に食べてもらうためにチョコを置くなど積極的に交流を行っていた。これは、事前インタビューの際にも確認した居心地の良さの個人差が現れていると考えた。また、B さんがはじめに置いた「風船のステッカー」は幼いころから自分が好きなものだと語り、一種の自己紹介が行われていたことがわ

かった。

次に一体感と居場所感の醸成について確認した。まずAさんは本を徐々に置くようになり、居場所感を持ちつつも「知らない人が来ると少し気まずかった」と、実験中に感じた居心地の悪さを語った。Aさんは事後アンケートの「この鍵とボックスによって、参加者同士で得た一体感の度合いを教えてください」という5段階評価で「3」とつけてくれたが、インタビューから実際はそこまで高くないと判断される。Bさんも「自分を開示していくのがいきなりは難しい」と答えた。ただBさんは、相手(Aさん)の教習所の卒業検定の合否結果が書かれた紙を見た際に、「他の参加者の普段の生活の様子が垣間見れたっていうのが一番印象に残って」いると、生活の中に他者を実感した瞬間を語った。他人と一緒に作り上げていることを実感し一体感が生まれたことが窺える。

次に、実験中に生まれた交流について質問した。Bさんは「普通に会うだけでは知らなかった(中略)発見を逆に箱があったからこそ知れた」と箱を介したコミュニケーションの面白みを語ってくれた。初対面のコミュニケーションでは生まれにくい交流が出来、興味を持っている様子だった。

本実験では鍵を用いることによって、ボックスにプライベート性を付与した。これは両者とも感じており、ともにプライベート性とパブリック性は半々であると語った。それにも関わらず、両者で使い方に差が出たのは、二人の個人の居心地の良さの違いが現れた結果だと考えられる。

また両者は共通して、交流の機会が不足していたと回答した。Aさんは、「交換日記的なことっていうか、相手と実験者と、何かその文通的な感じで、やり取りとかができたら、もう少し楽しかった」と語り、Bさんは「この本読んでるんだっていう発見を逆に箱があったからこそ知れたという感じだったので、その話とかもう少し聞きたいなと思いました」とボックスを利用して得た発見をもとに、コミュニケーションを取りたいと感じている様子だった。

最後に、周辺住民同士での交流スペースの鍵の共有については、両者とも同じマンションの住居人レベルなら良いとしながらも、Aさんは年代などバックグラウンドが違うと難しく、Bさんは自分を開示するには時間が必要だと語った。

5.3. 考察

本節では、実験で得られた結果をもとに『The Third Box』が与える影響について考察する。

5.3.1. 仮説に関する考察

本研究では「空間の合鍵を集団で共有することで、その場所を居場所と思う意識が高まり交流が生まれるのではないか」を仮説として立て、それを実証する実験を『The Third Box』として行った。

まず、結論から述べると本実験において鍵がもたらす居場所感について、直接的な因果関係を表すに十分な結果は得られなかった。理由は 2 点ある。

まず 1 点目は、再訪喚起の点だ。参加者はともに鍵を見て共通室に行こうと感じたと語った。しかし、A さんは鍵を見ることによって置いている本の存在を思い出し、それが行きたいという気持ちに繋がったと回答している。これは A さんが卒業論文を執筆中で、ボックスの中の本が必要であるから共通室に来たと捉えることも出来る。また、B さんは鍵をたくさん持ち歩いており「その中に埋もれてしまっていた」と語った。何度か見た際に思い出すきっかけになったと回答してくれたが、有効なデータではないと判断した。この二点に鑑み、再訪喚起について鍵の有効性を証明することは出来ないと考えた。

2 点目は居場所感が得られるまで時間がかかった点だ。A さんは会期終了までコミュニケーションを取るような行動は見せず、あくまで個人の物置として利用していた。交流を喚起できなかった点で鍵の有効性を証明できないと考えた。

しかし、一概に実験は失敗とは言えない。日本におけるサードプレイスには第二章でみたように日本におけるサードプレイスには交流型とマイプレイス型という 2 種類が存在しているからだ。本実験では交流を目指したため実験内容と相違してしまったが、A さんは参加回数も多く、インタビューでも他人がいると気になると回答していたためマイプレイス型でのサードプレイスが実現していたと考えることが出来る。B さんは実験を通してお菓子を置いていくなど交流型のアクションを起こすようになっていたため、実験を通してサードプレイスの実現、もしくはその兆候が見られたと考えられる。

5.3.2. 仮説以外の効果

実験前後のインタビューでは筆者が想定していなかった意見や感想を得ることが出来た。まず事前インタビューの中で、B さんの回答に興味深いものがあった。それは、共用玄関の鍵をマンションの居住者全員で共有しているという回答だ。これは近年の集合住宅ではスタンダードな形式で、実を言えば筆者も同じような共用玄関を持つマンションに住んでいるが、完全に抜け落ちていた視点であった。

B さんはこの共用空間に対して「建物の中入ってしまえば帰ってきたなって感じます」と答えており、安心感を持っているようだった。B さんはその理由について「生まれたときから同じマンションだから抵抗というかもう当たり前だ」と語っている。

これは周辺の生活者と鍵を共有している実例であると言える。この生まれつきという本人が認知できていない点で、どのような心理が働いているのか興味を持った。今回の実験に絡めることは出来なかったが、本実験と方向性の近い実験対象空間であると考えた。

また、鍵を用いたことによるボックスのプラベート性はボックスに入れる物に変化を与えた。A さんが自分のための物置として利用していたのだ。卒業論文のための参考文献のほか、特に卒業検定の合否結果はB さんの心境に大きく影響を与えており、ボックスの中で他者を実感するきっかけとなっていた。B さんは「普通に会うだけじゃ読んでいる本とか、さっきの不合格(卒業検定)とか絶対に知らないと思う」と語っており、普段と違うコミュニケーションやアプローチが出来たことに興味を持っていた。

これは筆者がまちづくりの文脈で興味を持ち『Fertile Machi』などで作品化してきた、「自分の街の他者の生活(意見)に目を向けること」に繋がるシーンであった。実験を通してこのような影響を喚起出来たことは、実験企画者として有意義なことであった。

5.3.3. 実験の反省と改善点

実験を通して得た反省と改善点についてまとめる。

まず反省として、実験期間が短かったことが挙げられる。実験参加者両者ともに、信頼関係の構築には時間がかかると考えており、初対面の状態から 1 週間で一体感を得るには限界があった。このことを考慮し、しっかり時間を取ったうえで関係の醸成を見守るべきである。

また、コミュニケーション方法が不足していたことも反省点だ。参加者は、普段から他者とボックスを介したコミュニケーションは行っておらず、実験開始直後には入れる物に困るなど戸惑いが見られた。お互い顔を合わせる機会や、話したり書いたりするコミュニケーション機会を増やす必要があると考えられる。

なお、本実験を通してお互い交流してみたいという欲求は喚起出来ていた。そのため、知り合い同士のコミュニティで本実験を行い、これまでとは異なる角度で相手を知ることで関係強化に繋がるのではないかと想定した。また、本実験単独では困難であるが、他のコミュニケーション方法とかけ合わせることで、関係構築の相乗効果を得ることが出来ると考える。

6. 結論

6.1.　本論のまとめ

本論文では、まちづくり活動で感じた筆者自身の「居場所がない」という問題意識と、サークルの事務所の合鍵を通して得た「居場所の意識」を掛け合わせ、「空間の合鍵を集団で共有することで、その場所を居場所と思う意識が高まり交流が生まれるのではないか」という仮説を立てた。そして、この仮説を検証するために『The Third Box』と命名した実験を設計し、結果を基に考察した。

第一章では筆者が郊外の街で感じている危機感を基にした研究動機について解説し、本論の構成を明らかにした。続く第二章では、関連動向として郊外の街の歴史と問題点、それに対する昨今の考え方を学び、研究に繋がる鍵の歴史文化について触れた。第三章では、夏に制作した『Fertile Machi』に触れ、筆者の街づくりに対する態度を明らかにした。そして第四章では、第二章の分析を踏まえ『The Third Box』を提案し、実験内容を説明した。第五章では『The Third Box』を実践した結果とその考察を行い、仮説の評価と改善点の分析を行った。

6.2.　今後の展望

本研究では、実験の効果を正確に測りたいがために他の信頼関係構築に関わる要素をないがしろにしてしまい、仮説の実証が出来なかった。しかし、参加者からは普通のコミュニケーションとは違ったアプローチが出来て楽しかったという声や、サードプレイスとして利用している様子がうかがえるなど、学びも得ることが出来た。関係構築の補助として、空間の共有や鍵の共有を提案し、今後も自分の街に興味を持つ人を増やしていきたい。

7. 謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々に多大なるご協力を頂きました。まずは、時間を問わず学生に接し、実験案が固まらずご心配をおかけし、執筆中の的を射ない質問にも真摯に答えてくださったチェン・ドミニク教授に心から感謝申し上げます。続いて、実験に参加してくださった 2 名の方、お忙しい中ありがとうございました。またともに支え合った発酵メディア研究ゼミの皆さん、ありがとうございました。学生生活の締めくくりとして執筆した本論文で皆様と関われたこと、大変光栄に思います。

8. 参考文献

- 東急株式会社「長期経営構想」2019

(https://ir.tokyu.co.jp/ja/ir/management/lplan.html) (2023/12/12 閲覧)

- 消防庁国民保護・防災部 防災課「災害対応能力の維持向上のための地域コミュニティのあり方に関する検討会報告書」2009

- 内閣府 HP「選択する未来（1）総人口」

(https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/sentaku/s2_1.html)(2023/12/13 閲覧)

- 鈴木雅和・山本幹雄「ニュータウン再生における緑環境ネットワークの役割」都市住宅学会，2010

- 小山永樹「第 7 期高度成長期～戦後地方自治制度の定着・発展期(1961-1974 年)」自治体国際化協会，2010

- 国土交通省「大都市圏郊外におけるまちづくり（柏市豊四季台団地における取組み)」2014

(https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h26/hakusho/h27/html/n1222c40.html)
(2023/12/12 閲覧)

- 日本商工会議所「2021 年度「民間主導のまちづくりに関する実態調査」報告書」2022 年 3 月

- 和田清美「現代コミュニティの社会設計：新しい〈コミュニティ形成・まちづくり〉の思想」学文社，2021

-「次世代郊外まちづくり基本構想」

(https://jisedaikogai.jp/machizukuri2013/) (2023/12/12 閲覧)

-東急(株)公式 HP「東急株式会社の街と住まい-次世代郊外まちづくり WISE CITY」

(https://www.109sumai.com/development/wisecity.html) (2023/12/12 閲覧)

-森豪大，籔谷祐介，宋俊煥「高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響-富山県高岡市に居住する高校生を対象として」日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.57 No.3，2022

- 伊藤香織「シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素 富山市中心市街地と富山地域を事例として」日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.54 No.3，2019

- レイ・オルデンバーグ著；忠平美幸訳「サードプレイス-コミュニティの核になる『とび

きり居心地よい場所』」みすず書房，2013

-小林重人,山田広明「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究 : 石川県能美市の非常設型「ひょっこりカフェ」を事例として」地域活性学会 地域活性研究 5 巻，2014

-下北線路街「下北線路街とは？」

（https://senrogai.com/ ） （2023/12/12 閲覧）

-加藤秀雄「鍵あるいは錠の文化史的研究のためにーテクストとフィールドに見るその象徴性一」常民文化（31), 25-44, 2008-03

-国立国語研究所「アイデンティティー」

（https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian1_4/Words/identity.gen.html) (2023/12/13 閲覧）

- 片岡亜紀子・石山恒貴『地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果』地域イノベーション ＝ 地域イノベーション 9, 2017

- 小浜ふみ子『都市コミュニティの歴史社会学』御茶の水書房,2010

-倉持香苗『コミュニティカフェと地域社会-支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店,2014

-

-